

# 本郷流川遺跡 3

福岡県文化財調査報告書 第 282 集

2022

九州歴史資料館



## 序

本報告は、国道322号改良工事に先立って令和3年度に実施した、三井郡大刀洗町大字本郷所在の本郷流川遺跡の埋蔵文化財発掘調査の記録です。

今回の調査では、古墳時代後期の集落縁辺部の状況を確認しました。これまでに実施してまいりました2度の発掘調査に加えて、今回の調査成果により、本郷流川遺跡の全体像は徐々に明らかになりつつあります。

三井郡大刀洗町は筑紫平野のほぼ中央部、筑後川の中流右岸に位置し、現在でも豊かな農村地域の景観を保持していますが、それは古墳時代には既に形成されていたようです。

本書が地域の歴史認識と文化財愛護思想の深化の一助となれば幸いに存じます。

発掘調査および報告書作成にあたってご協力いただいた方々に厚く感謝申し上げます。

令和4年12月28日

九州歴史資料館  
館長 城戸 秀明

## 例 言

1. 本書は、国道322号改良事業にともなって令和3年度に発掘調査を実施した、三井郡大刀洗町所在の本郷流川遺跡の調査の記録である。
2. 発掘調査と整理報告は、久留米県土整備事務所の執行委任を受け、九州歴史資料館が実施した。
3. 本書に掲載した遺構写真および遺物写真の撮影は担当者が行った。空中写真の撮影はワールド・フォト・サービスに委託した。
4. 本書に掲載した遺構図の作成は調査担当者が行った。
5. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において実施した。
6. 出土遺物および図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
7. 本書に使用した周辺遺跡分布図は国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「鳥栖」を加筆改変したものである。また、本書に掲載した調査範囲図は、久留米県土整備事務所が作成した1/500地形図を加筆改変したものである。本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。
8. 本書の執筆と編集は小川泰樹が担当した。

## 本文目次

I	はじめに	1
II	位置と環境	2
III	調査の内容	4
IV	おわりに	20

## 図版目次

図版 1	1	本郷流川遺跡遠景(北東上空から)
	2	同(南東上空から)
	3	北東調査区全景(北東上空から)
図版 2	1	北東調査区全景(北西上空から)
	2	南西調査区全景(南西から)
	3	1トレンチ(西から)
図版 3	1	2トレンチ(西から)
	2	2トレンチ下層(北西から)
	3	3トレンチ(東から)
図版 4	1	4トレンチ(東から)
	2	1号竪穴状遺構(東から)
	3	1号竪穴状遺構土層(東から)
図版 5		出土遺物 1
図版 6		出土遺物 2
図版 7		出土遺物 3
図版 8		出土遺物 4
図版 9		出土遺物 5
図版 10		出土遺物 6
図版 11		出土遺物 7

## 挿図目次

第1図	大刀洗町の位置	1
第2図	周辺遺跡分布図(1/25,000)	3
第3図	調査範囲図(1/1,000)	5
第4図	遺構配置図(1/300)	6
第5図	1号竪穴状遺構実測図・土層実測図(1/80)	8
第6図	1号竪穴状遺構出土土器実測図①(1/3)	9
第7図	1号竪穴状遺構出土土器実測図②(1/3)	10
第8図	トレンチ土層実測図(1/60)	12
第9図	トレンチ出土土器実測図①(1/3)	13
第10図	トレンチ出土土器実測図②(1/3)	14
第11図	遺構面・包含層出土土器実測図①(1/3)	16
第12図	遺構面・包含層出土土器実測図②(1/3)	17
第13図	遺構面・包含層出土土器実測図③(1/3)	18
第14図	遺構面・包含層出土土器実測図④(1/3)	19

## I はじめに

### 1. 調査に至る経緯

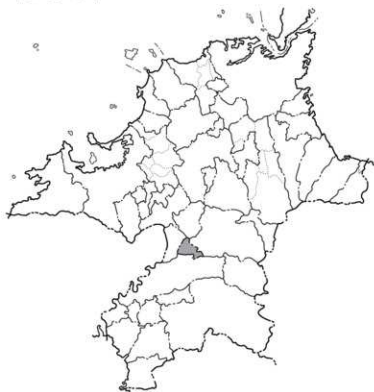
国道322号の拡幅による歩道設置事業に伴う埋蔵文化財の対応について、令和3年(2021)4月20日に、福岡県久留米県土整備事務所、大刀洗町教育委員会、福岡県教育庁教育総務部文化財保護課、九州歴史資料館の4者で協議を行い、九州歴史資料館が発掘調査を実施することで合意した。同年6月15日には、福岡県久留米県土整備事務所、大刀洗町教育委員会、福岡県教育庁教育総務部文化財保護課、九州歴史資料館の3者で現地協議を行い、条件面等を確認した。

調査範囲は、令和2年11月18・27日に大刀洗町教育委員が実施した試掘調査の結果に基づいて決定した。隣接する現道と耕作地への影響をも配慮した結果、幅5～6m、長さ130mの狭長な調査区となり、調査面積は約1,000㎡である。

本郷流川遺跡では、国道322号バイパス建設事業に伴って、既に2度の発掘調査を福岡県教育委員会によって実施している。平成12年(2000)4月18日～7月4日に行ったものを一次調査、平成15年(2003)12月10日～翌年2月16日に行ったものを二次調査とし、今回の発掘調査を3次調査とする

福岡県教育委員会 2001『本郷流川遺跡』福岡県文化財調査報告書第165集

福岡県教育委員会 2005『本郷流川遺跡2』福岡県文化財調査報告書第196集。



第1図 大刀洗町の位置



遺構掘削作業

## 2. 調査の組織

発掘調査から整理作業、報告書作成にかかる関係者は以下のとおりである。

	令和3年度	令和4年度
九州歴史資料館		
館長	城戸秀明	城戸秀明
副館長	安永千里	吉村靖徳（兼埋蔵文化財調査室長）
総務室長	伊藤幸子	黒岩計光
総務班長	高山美保子	高山美保子
主任主事	小原大輔	古賀知香
	田中佑弥	小原大輔
主事	具志堅靖知	原口美紀
埋蔵文化財調査室長	吉村靖徳	
文化財調査班長	森井啓次	森井啓次
参事補佐	小川泰樹（調査担当）	小川泰樹（整理・報告担当）

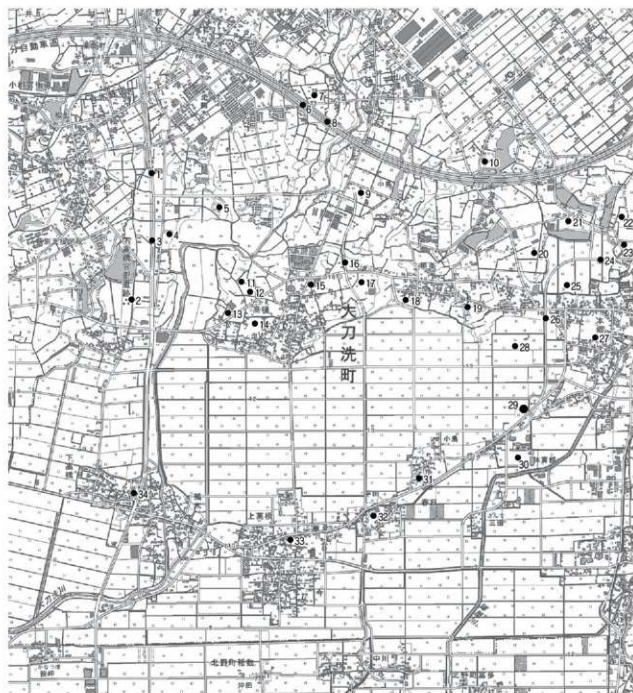
## II 位置と環境

大刀洗町は、福岡県の中南部に位置し、朝倉市、筑前町、久留米市、小郡市に隣接し、平成の大合併を経た結果、三井郡唯一の町となった。鉄道は、甘木鉄道甘木線と西鉄甘木線が通り、町内に合計3箇所の駅がある。道路は、旧秋月街道を踏襲した国道322号が幹線道路として機能し、また国道500号もある。高速大分自動車道が町内を通過し、筑後小郡インターチェンジが最寄りとなる。歴史的には、薩摩街道と秋月街道が交差する位置にある本郷が宿場町として発展し、交通の要衝の地といえる。

地形的には、筑紫平野の中央部に位置し、筑後川中流右岸にあたる。町内に山地はなく、町域の北半部は大刀洗台地とも呼ばれる洪積台地であり、一方の南部では筑後川・佐田川・小石原川が開析した沖積平野が広がっており、一帯は現在でも豊かな農村地域の景観を維持している。

埋蔵文化財の調査は、大分自動車の建設に伴って昭和58年(1983)から実施した、宮巡遺跡、春園遺跡、十三塚遺跡から始まっており、歴史は比較的浅い。平成に入って町にも文化財担当の職員が配置されることで、以降、発掘調査件数は飛躍的に増加し、地下の状況も徐々に明らかになってきている。しかしながら、町北半部の台地上では旧石器時代以降、各時代の遺跡が数多く調査されているのに対して、低地では調査件数もまだまだ少ない。国道322号建設に伴って平成5年(1993)から実施した町口遺跡、本郷流川遺跡が本格的な発掘調査の嚆矢とも言える。本郷流川遺跡1・3次調査では古墳時代後期以降の大規模な集落の縁辺部の様相を呈しており、遺跡の中心部は調査地点外の南東側に広がっていることが想定される状況である等、この地区では今後継続的な発掘調査によって歴史の復元作業が必要であると考えられる。





- |           |          |          |           |            |
|-----------|----------|----------|-----------|------------|
| 1 栗崎遺跡    | 2 上野遺跡   | 3 馬屋元遺跡  | 4 横道遺跡    | 5 木ノ間遺跡    |
| 6 宮巡遺跡    | 7 山隈城    | 8 春園遺跡   | 9 中西又原遺跡  | 10 十三塚遺跡   |
| 11 井手ノ上遺跡 | 12 小坂遺跡  | 13 八田遺跡  | 14 小道遺跡   | 15 辻遺跡     |
| 16 又原遺跡   | 17 塚添遺跡  | 18 甲条城   | 19 北松木遺跡  | 20 鶯塚古墳群   |
| 21 辰口遺跡   | 22 温水遺跡  | 23 向八坂遺跡 | 24 西森田遺跡  | 25 町浦遺跡    |
| 26 町口遺跡   | 27 三原城   | 28 畑築地遺跡 | 29 本郷流川遺跡 | 30 大洗中学校遺跡 |
| 31 小島遺跡   | 32 南村開遺跡 | 33 上高橋城  | 34 高橋城    |            |

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

### Ⅲ 調査の内容

#### 1. 調査の概要

今回の調査地点は、一級河川筑後川とその支流の小石原川によって開析された筑後平野の一角に立地する。現地は現在まで水田として利用されてきた。大刀洗町教育委員会が実施した試掘調査の結果に基づいて、事業範囲のうち三井郡大刀洗町大字本郷 456-1、458、466-2、497-1 の範囲を調査対象地とし、調査面積は 1,000 m<sup>2</sup>である。

令和3年(2021)11月4日から重機による表土掘削作業を開始した。今回の調査は道路拡幅工事に伴うことから、調査区は北東から南西に延びる狭長なものとなった。事業が道路拡幅であることから、調査区の南東側は交通量の多い現在の国道に平行して接しており、現状で水田面が 0.7 m 程低く、遺構面までは南西側の最大箇所でも 2 m を超える比高差となる。このため、掘削は小型の重機での慎重な作業を行った。しかも、事業地内で排土を処理せざるを得ない状況であったため、狭長な調査区内を長く土送り作業を行う必要があった。その結果、調査範囲の北東半部の調査が一旦終了した後に排土を移動して南西半部の調査を行う「反転作業」を実施した。

北東半部の掘削作業がある程度進んだ 11月6日から作業員による遺構掘削作業を開始し、12月24日にドローンによる空中写真を撮影して、北東半部の調査を終了した。年が明けた令和4年1月5日から再び重機を搬入して排土移動と掘削作業を開始、12日から作業員による南西半部の調査にかかった。1月19日に調査区南西半部の写真撮影、翌20日に現地での調査を終了、28日に重機での埋戻し作業まで完了した。

#### 2. 遺構と遺物

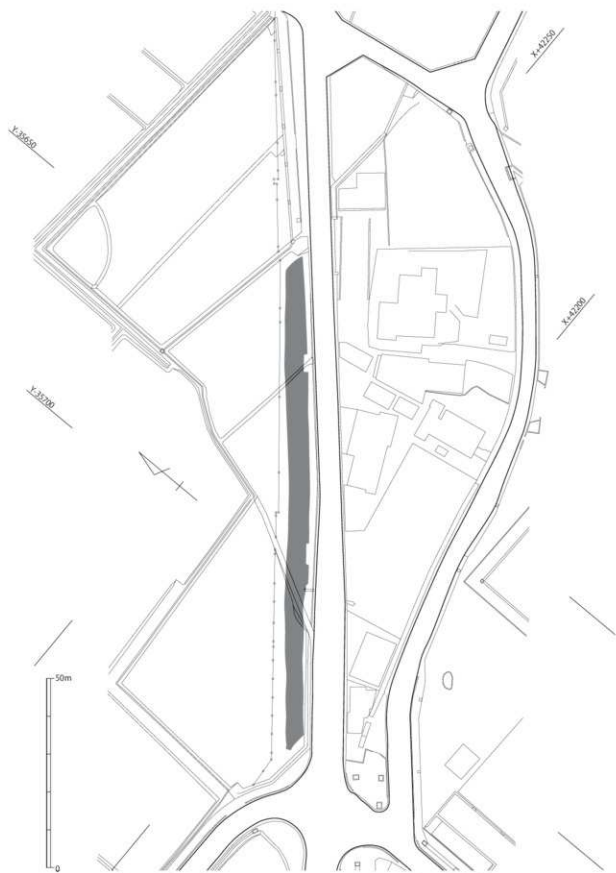
今回の調査地点は、現在まで水田として利用されてきた。調査の結果、北東側約1/3の区域では、耕作土から 0.6 ~ 1.0 m 程の深さで淡灰褐色粗砂の比較的安定した遺構面に達し、近現代の溝といくつかの遺構を検出した。一方の南西側は主に暗灰色粘質土あるいは粘



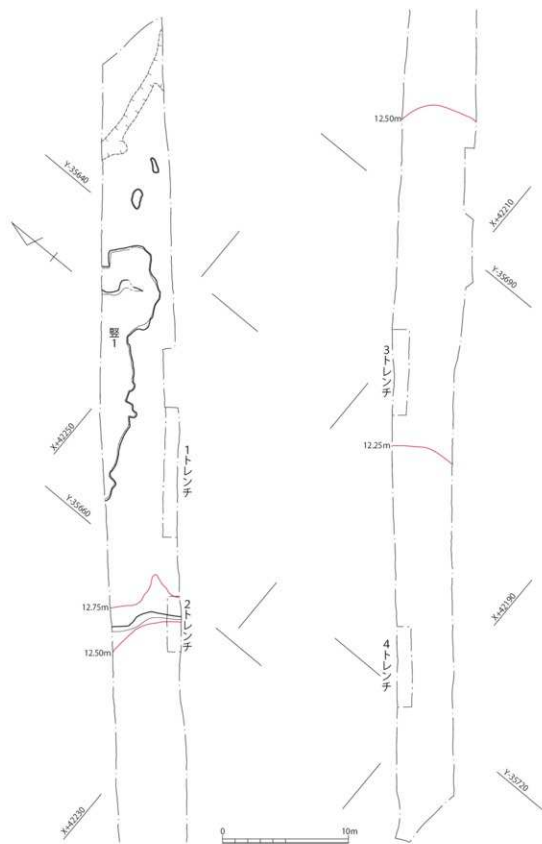
表土掘削作業



遺構検出作業



第3図 調査範囲図 (1/1,000)



第4図 遺構配置図 (1/300)

土の湿地状を呈する。この範囲の4箇所にトレンチを設定して、下層の状況を確認した。

調査区全体で、北東端から 南西側に向かって徐々に低く傾斜しており、遺構面は標高 12.0 ~ 13.1 m の範囲で、比高差が 1.1 m 程ある。

また、遺構面とその上位の灰色粘質土層中を中心にして相当量の古墳時代後期を中心とした土器類が出土しており、遺物包含層となっている状況が確認できた。遺物の出土は、調査区北東側が多く、南西に行くにしたがって量が減る傾向があった。

#### 1号竪穴状遺構 (図版4、第5図)

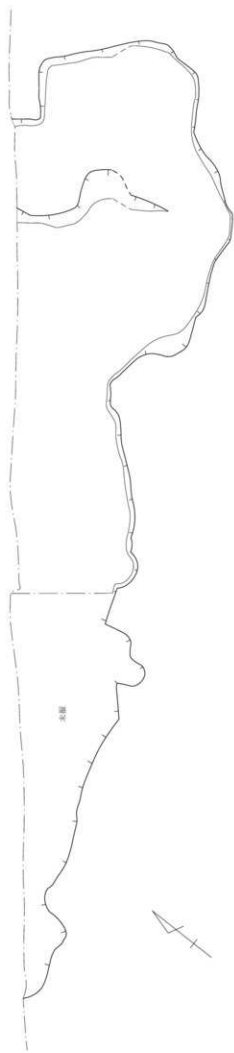
調査区北東部の淡灰褐色粗砂層上に位置する。調査区内で 20 × 5 m 分を確認したが、北西側の調査区外に更に広がる。調査範囲で見ると、平面形は不整形である。深さは 0.3 ~ 0.4 m 程で、底面は比較的平らとなる。埋土からは比較的多くの土器類が出土した。

全体的な平面形は不明ながら、調査範囲で不整形を呈することなどから、人為的な遺構というよりも地形的な落ち等である可能性も高いものと思われる。

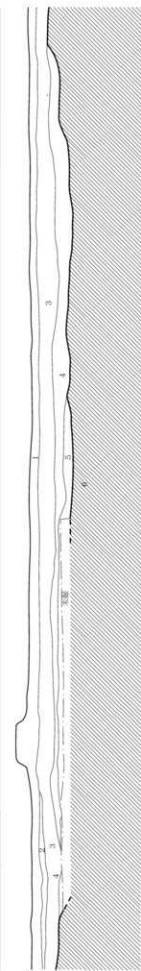
#### 出土遺物 (図版5~7、第6・7図)

1~27は土師器。1~6は、いわゆる模倣杯である。1・2は形状からは杯蓋と考えられるが、内面までミガキ調整を行うなど、杯身として使用したことも考えられる。口径 14.0 cm × 13.3 cm。1は天井部外面はヘラケズリ調整で、蓆状の圧痕が残る。2は天井部外面までミガキ調整で、大きく黒斑が見られる。3~6は杯身としたが、蓋との差が微妙なものもある。口径 12.0 ~ 13.0 cm。内面はミガキ調整、外面は 3・4・6は下半部をヘラケズリ調整、5は全体にミガキ調整で仕上げる。5・6は胎土が精良で、殊に6は砂粒もほぼ含まない。7~16は高杯であろう。7は須恵器の形状と技法の影響を強く受けたもので、杯部中位に扁平な突帯を持つやや特殊な形状である。胎土が精良であることと焼成から土師器として良いであろう。復元口径 18.0 cm。8は内外面丹塗りで粗いミガキ調整で仕上げる特殊な器形である。杯部は椀状で口径 14.3 cm、胎土には砂粒を比較的多く含み、器壁は厚い。9から16は、ほぼ同様の器形と思われ、全体に胎土は精良である。9・10は杯部で、下位で稜を持って屈曲する。復元口径 13.6 cm。11~16は脚部で、外面は縦方向のヘラナゲ調整で稜を作り出して成形する。17~23は甕で、径 15 cm 以下程度の小形のもの (17・18) と中形のもの、口径と胴部径が大差ないもの (17・23) と胴部の張ったもの (22他)、などの形状的なバリエーションがある。24~27は甕等の把手で、24・27は下位に煤が付着する。

28~44は須恵器である。28~30は杯蓋。28・29は天井部と体部の境に沈線が巡る。28・30は天井部にヘラ記号がある。口径 14.0 ~ 11.6 cm。31~37は杯身。31・37の口縁部には打ち欠いた痕跡がある。口径 10.8 ~ 14.2 cm。38・39は高杯の脚部。38は中位に2条の沈線が巡る。39は脚端部である。40は甕で、肩部の2条の沈線の間に木口状の工具による刻目文がある。復元径 9.0 cm。41は平瓶の頸部付近。頸部には厚みがあり、体部外面にはカキ目が認められる。42は壺の体部で、扁球形を呈する。肩部には沈線が認められ、下位はヘラケズリ調整で仕上げ、器壁は薄い。43・44は甕。43は頸部外面に楕状工具による文様がある。口径 25.0 cm × 25.2 cm。



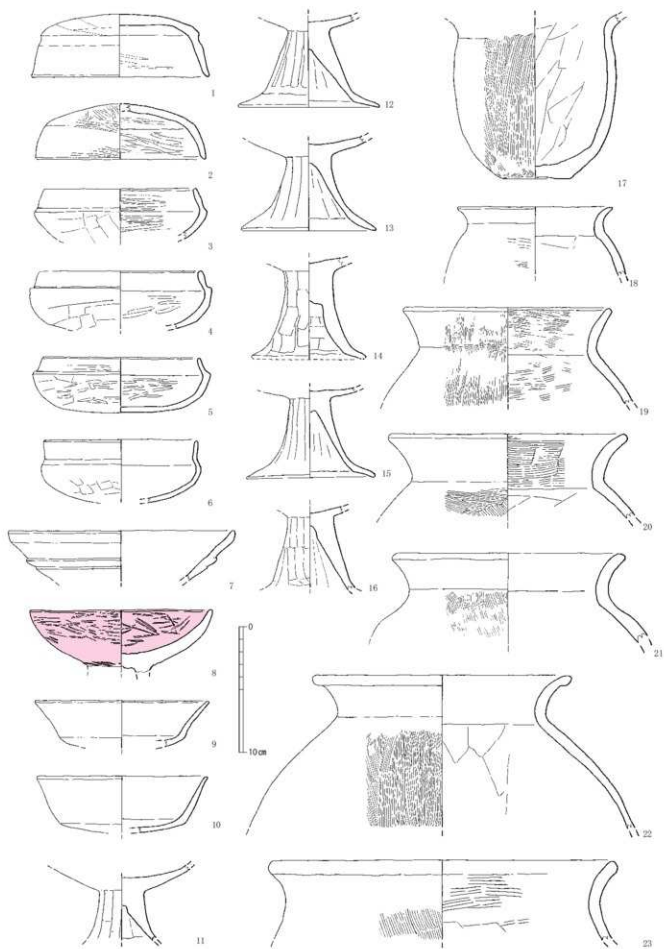
14.0m



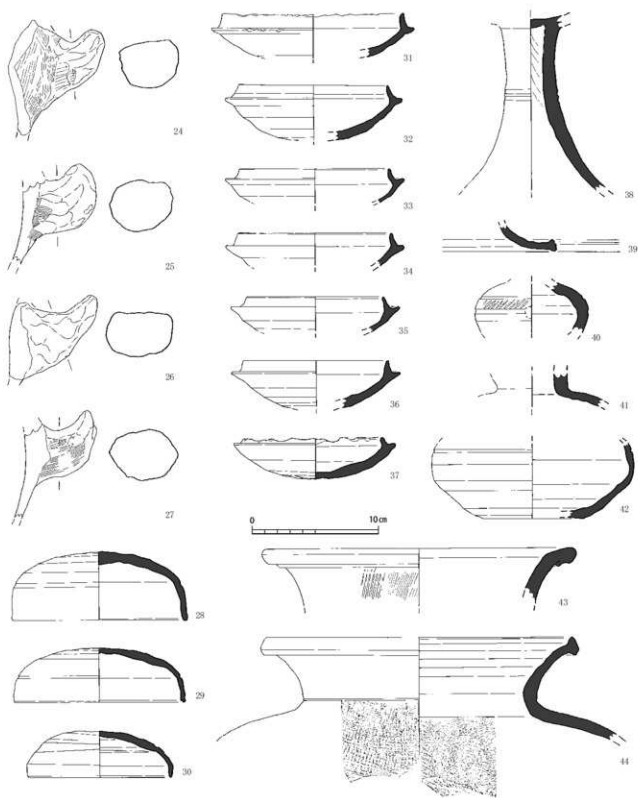
- 1 褐色粘土 (膠粘土)
- 2 褐色粘土之砂質土
- 3 灰褐色粘土
- 4 灰白色砂 礫・粗砂含む (遺物包含)
- 5 褐色粘質土 木質含む
- 6 褐色褐色粗砂 礫・褐色粘質土含む

0 5m

第5図 1号壑穴状遺構美湖図・土層美湖図 (1/80)



第6圖 1号竖穴状遺構出土土器実測図① (1/3)



第7图 1号竖穴状遗构出土土器实测图② (1/3)



#### トレンチ (図版2～4、第4・8図)

湿地状を呈する調査区南西側2/3の範囲の4箇所にトレンチを設定して、下層の状況を確認した。1トレンチでは、遺構面が南西側に低く傾斜しており、その上面に暗灰色粘質土が被っている状況が確認できた。しかし2トレンチの箇所では、図示した以外に重機でさらに1m以上掘り下げてみたが、暗灰色粘土が続き下層には到達しなかった。この層には遺物は含まれていない。1トレンチ付近から確認できる暗灰色粘質土層の上面は南西側に向かって徐々に傾斜しており、4トレンチ付近では0.7m程度低くなっている。3・4トレンチでは、暗灰色粘質土の下層で灰色シルト質土を検出し、さらに掘り下げると灰白色砂層に達して3トレンチでは湧水が始まった。

#### 出土遺物 (図版7・8、第9・10図)

1～9は1トレンチ出土土器。1～3は土師器模倣杯で、形状的に微妙なものもあるが、ここでは1を杯蓋、2・3を杯身として報告する。3点とも胎土は精良で、1は天井部を、2は底部をヘラケズリ調整でそれ以外はヨコナデ調整、1・2は風化のためにミガキ調整については不明である。3は内外面を黒色に彩色し、ミガキ調整で仕上げる。1は復元口径12.4cm、2が10.0cm。4～6は高杯であろう。ともに胎土は精良で、調整は風化のために不明瞭であり、殊に6は器面の風化が激しい。復元口径11.0～13.0cm。7・8は甕。8は小形のもので、復元口径12.0cm。口縁部内面に工具痕が残り、内面は燻されたような炭素の吸着が見られる。9は須恵器杯身で、底部の内面に同心円状の当具痕が残り、外面にはヘラ記号がある。復元口径12.4cm。

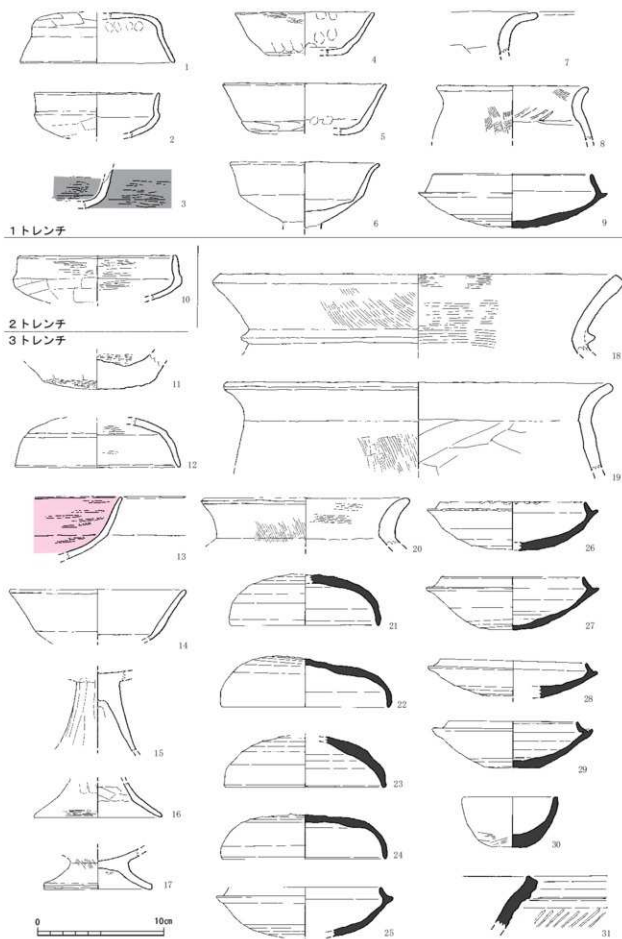
10は2トレンチ出土の土師器模倣杯身。胎土は精良で、外面下半部はヘラケズリ調整、それ以外の内外面はミガキ調整。復元口径12.6cm。

11～31は3トレンチ出土土器。11は弥生土器甕の底部で、器壁が厚く、底面は膨らみタタキ調整の痕跡が残る。12は模倣杯蓋で、胎土は精良、器面は風化しているがミガキ調整であろうか。復元口径13.1cm。13～16は高杯で、すべて胎土は精良である。13・14は杯部で、器面は風化しているが内面にはミガキ調整痕が残る。13は内面に顔料を塗布しているようで、現在褐色を呈するが本来は赤色であろうかと思われる。14は復元口径13.5cm。15・16は脚部で、ヘラ状工具で稜を作る。16の脚端部にわずかにミガキ調整の痕跡が残る。復元底径10.2cm。17は脚付きの甕の脚部であろう。外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整で工具痕が残る。底径8.4cm。18は弥生土器甕で、口縁部と体部の境に断面三角形の突帯があり、内外面ハケメ調整。復元口径32.6cm。19・20は土師器甕で、大小がある。19の口縁部は、内面ケズリ調整後にヨコナデ調整、外面ヨコナデ調整。復元口径30.2cm。20は復元口径15.8cm。21～32は須恵器。21～24は杯蓋で、天井部はヘラケズリ調整、21と24にはヘラ記号がある。口径11.6～13.5cm。25～29は杯身。26は口縁部と受部に打ち欠きの痕跡が残り、また底部にヘラ記号がある。27は受部上面の一部に細線の沈線文があり、ある程度意図的なものと思われる。口径10.2～12.0cm。30は小形の碗。底部は厚く、外面には切り離しの際の工具痕が多く残り、それ以外をヨコナデ調整で仕上げる。復元口径8.0cm、器高4.0cm。31・32は甕。31は口頸部で焼成は堅緻、頸部外面にヘラ描きの斜線文がある。32は大形の甕の体部で、全面にタタキ調整の痕跡がある。

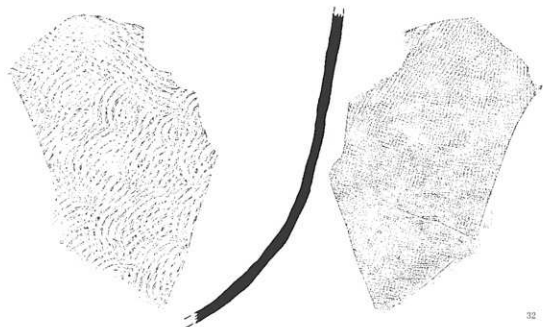
33～39は4トレンチ出土。33は弥生土器甕で、口縁部が短く屈曲して開く。復元口径25.0



第8図 トレンチ土層実測図 (1/60)

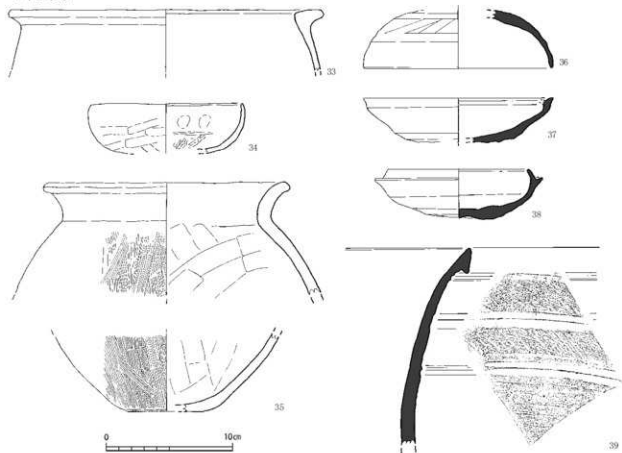


第9図 トレンチ出土土器実測図① (1/3)



3 トレンチ

4 トレンチ



第 10 図 トレンチ出土土器実測図② (1/3)

cm。34・35は土師器。34は椀で、外面下半部はケズリ調整、それ以外はヨコナデ調整であるが、内面の一部にミガキ調整の痕跡が残る。復元口径12.0 cm。35は甕で、肩部以上と底部付近に分かれるが同一個体と思われる。復元口径19.6 cm。36～39は須恵器。36は杯蓋で、天井部内面に同心円状の当具痕が残る。復元口径15.0 cm。37・38は杯身で、37はやや軟質に焼成されている。38の口径11.0 cm。39は甕の口頸部で、頸部を沈線で区切って櫛状工具による波状文を施す。

#### 遺構面・包含層出土遺物 (図版8～11、第11～14図)

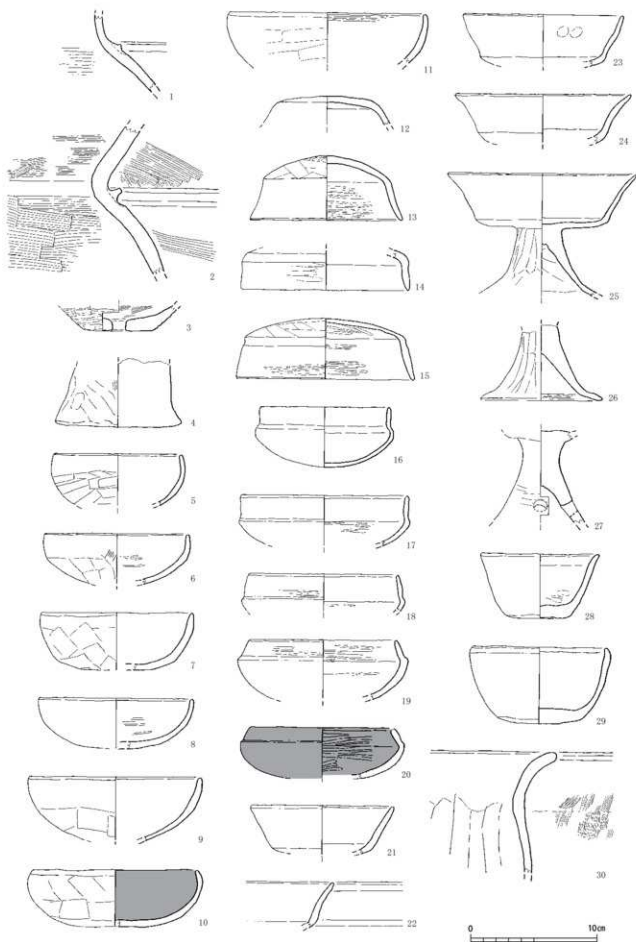
調査区の遺構面とその上層にあたる灰色粘質土中から相当量の土器が出土した。数は少ないが弥生土器は調査区南西側に比較的集中しており、逆に古墳時代土器はそちら側からの出土が希薄になる傾向があった。いずれも遺構に伴うものではないが、近接地の遺構の分布状況を示すものと思われる。

1～3は弥生土器。1は壺で、頸部と体部の境に突帯があり、内面にわずかにハケメ状の工具痕が残る。2・3は甕。2は頸部と体部の境に突帯があり、内外面ハケメ調整。3は底部で、内面ハケメ調整、外面タタキ調整で仕上げ、底部に焼成前の穿孔がある。

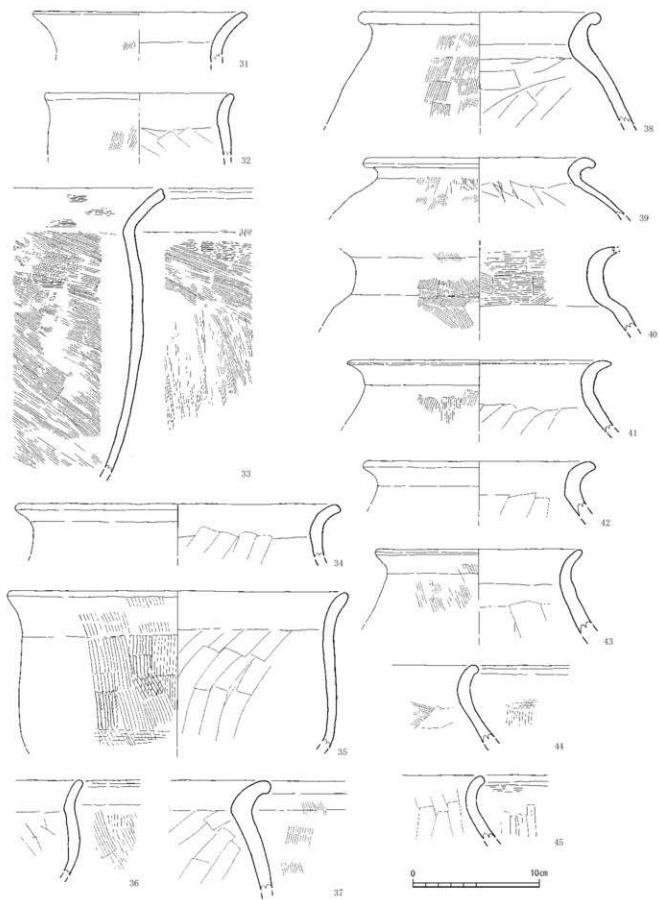
4は支脚であろう。底部で広がり、断面円形、中実である。

5～11は土師器椀で、全体的に胎土は精良だが7はやや粗い。器表面の風化が進んだものもあるが、外面下半部はケズリ調整、6・7は内面にミガキ調整の痕跡が残る。10は内面に黒色顔料が付着しており、黒彩であったものと思われる。復元口径10.6～15.4 cm。12～20は模倣杯で、形状的に微妙なものもあるがここでは12～15を杯蓋、16～20を杯身とした。全体に胎土は精良である。杯蓋は、器表面は風化しているが、13・15は天井部ヘラケズリ調整、13～15では内外面あるいは片面にミガキ調整の痕跡が残る。口径12.1～14.2 cm。杯身では、16～18が殊に胎土が精良でありその分、器表面の風化も進んでいる。17～20は内外面あるいは片面にミガキ調整の痕跡が確認できる。20は胎土がやや粗いが、内外面に黒彩の痕跡がある。口径11.2～13.2 cm。21～27は高杯。21～26は全体に胎土が精良で、風化が進み器面調整は不明瞭である。脚部はヘラ状工具で縦方向の稜を作り出す。復元口径12.8～14.9 cm。27は胎土に砂粒を多く含み、脚部はヨコナデ調整で3方向に穿孔がある。28・29は小形の鉢で2点とも完形である。器壁は厚く、粗いナデ・ヨコナデ調整で、素朴な手捏ねの風合いがある。28は口径9.2 cm、器高5.1 cm、29は口径10.5 cm、器高6.1 cm。30～49は甕。胴部の張りが小さいもの(30～36)と、口縁部の屈曲が強く胴部が張っているもの(37～42)などがある。47は口径が小さく長胴となり、また内面のケズリ調整が深く特徴的である。33は胴部内面までハケメ調整を施す。50～52は甕等の把手。50は小振りで下方に棒状工具の刺突による凹みがある。51は把手部分にまでハケメ調整を施す。

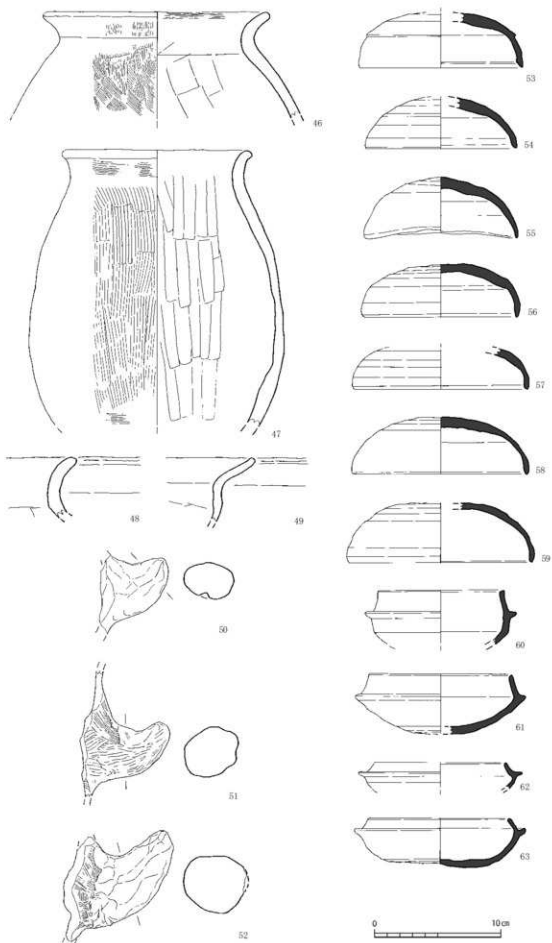
53～80は須恵器。53～59は杯蓋で、口径12.0～14.8 cm。53は天井部・口縁部境と口唇部内面に段を有する。55は歪みが目立つ。58は焼成は堅緻で茶褐色を呈し、天井部には重ね焼きの痕跡が残る、またヘラ記号がある。60～72は杯身で、口径10.0～12.4 cm。60は立上り部が長く直立しており、ここでは古層を呈する。61も立上り部がやや長い。72は外傾する高台のあるもので、高台径9.4 cm。64・65は口縁部と受部に打ち欠きが見られる。64・72は底部に、65は体部にヘラ記号があり、67・69・71でも部分的ではあるがヘラ記号が確認できる。61・64・65・71は焼成が軟質で、65は灰茶色、それ以外は淡灰色を呈する。73は杯身と同じ形状の高杯で、口縁部と受部に打



第11图 遺構面・包含層出土土器実測図① (1/3)

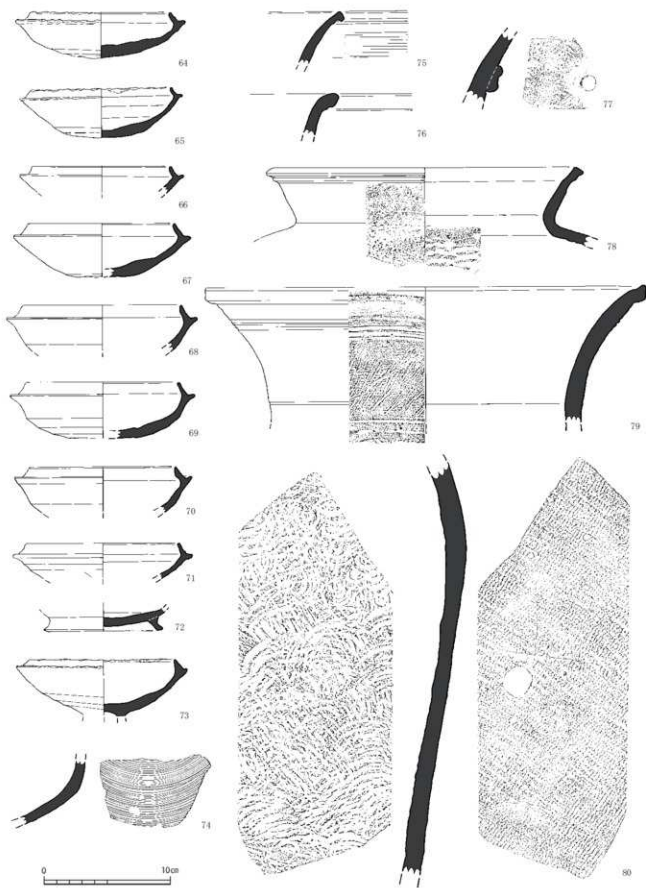


第12图 造構面・包含層出土土器実測図② (1/3)



第 13 圖 遺構面・包含層出土土器実測図③ (1/3)





第14図 遺構面・包含層出土土器実測図④ (1/3)

ち欠きが見られ、焼成は軟質で淡灰色を呈する。口径 11.5 cm。74 は提瓶であろう。体部に厚みがあり、全面カキメ調整。75～80 は甕。77 も甕の頭部と思われる、櫛描き波状文と、釘状の貼付文がある特殊なものである。75・76・78・79 は口頭部で、75 はカキメ状文、77 はヘラ記号、79 は粗い斜線文が見られ、いずれも焼成は堅緻で黒灰色を呈する。80 は大形の甕の体部で、全面にタタキ調整痕が見られる。

## IV おわりに

以上が本郷流川遺跡 3 次調査の内容である。

今回の調査は歩道設置のための道路拡幅に伴うものであり、このため調査区は幅 5～6 m、長さ 130 m という狭長なものとなった。検出した主な遺構は、堅穴状遺構であるが、底面はほぼ平らであるものの平面形状が不整形であり、調査範囲で見える限りでは、人為的な遺構というよりも地形的な落ち等である可能性が高いものと思われた。しかし、埋土からは古墳時代後期の土器が相当量出土しており、この時期に埋没したものと考えられた。

調査区の北東側約 1/3 の範囲では比較的安定した遺構面を検出し、一方の南西側 2/3 は湿地の様相を呈しており、全体で 1 m 以上の比高差で徐々に南西側に低く傾斜している状況が確認できた。湿地状とした暗灰色粘質土・粘土からは、トレンチで掘削した限りでは遺物が出土していない。このことから、地形はそれ以前からのものであった可能性が高いものと考えられ、水田として利用されれば平坦な現在とはかなり様相を異にしていたであろうことが確認できた。

今回の遺構面の上層には、灰色粘質土が堆積しており、この層が遺物包含層となって、ここを中心に多量の土器が出土した。出土した土器は 6 世紀後半代のものが大半であるが、弥生時代後期以降のものも若干含まれていた。古墳時代の土器は、全体的に器表面の状況が良好なものが多く、また完形に近いものが比較的多いことから、すぐ隣接地に遺構が存在することが想定される。出土した古墳時代土器では、土師器の杯・高杯が目立つ。全体に胎土が極めて精良で、それゆえに器表面が風化しているものも多い。模倣杯が地域的にも特徴的であるが、系譜的に須恵器の杯身・杯蓋を模倣したものに違いはないであろうが、形状的に身・蓋の区別の付きにくいものもあり、また蓋としたものでも内面にまでミガキ調整を行うなど、両者を区別して使用していなかった可能性が感じられた。

今回の発掘調査では、遺構は明瞭ではないものの、遺物の出土状況等から判断すれば、集落の縁辺部の様相を呈している。当時の地形では比較的低い位置の、湿地との境界部分を調査したこととなった。現在の地形を見ると、国道を挟んで南東側の大刀洗中学校周辺の地形が高くなっており、集落の中心はこちら側にあるものと思われる。1 次調査でも、これと同様の知見を得ている。

今回の狭長な調査区は、規模の大きな試掘溝としての役割をも併せ持つて、本郷流川遺跡の性格と当時の景観を復元する上での、一定の成果は提示できたものと考えている。

# 図 版



1 本郷流川遺跡遠景  
(北東上空から)



2 同(南東上空から)



3 北東調査区全景  
(北東上空から)

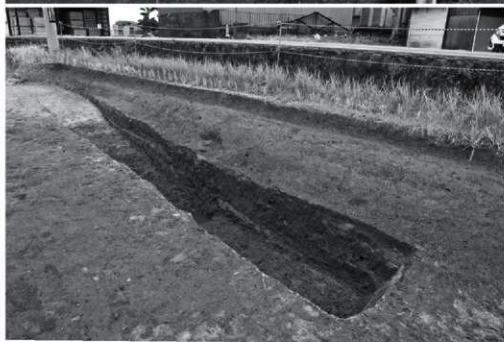




1 北東調査区全景  
(北西上空から)



2 南西調査区全景  
(南西から)



3 1 トレンチ (西から)

1 2 トレンチ (西から)



2 2 トレンチ下層  
(北西から)



3 3 トレンチ (東から)





1 4トレンチ (東から)



2 1号堅穴状遺構  
(東から)



3 1号堅穴状遺構土層  
(東から)





第6图-1



2



3



4



5



7



8



10



12



13



14



15



20



21



22



23



第7图-24



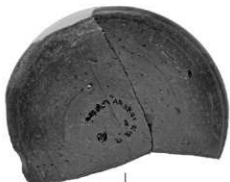
25



26



27



28



29



30



32



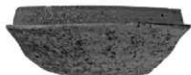
33



36



37





38



40



41



42



44



第9图-6



9



12



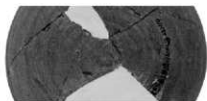
15



17



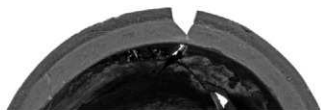
22



24



26



27



29



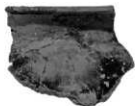
30



31



第10图-32



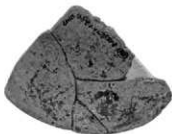
35



第11图-3



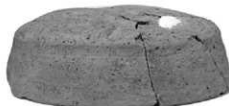
4



10



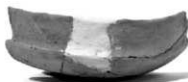
13



15



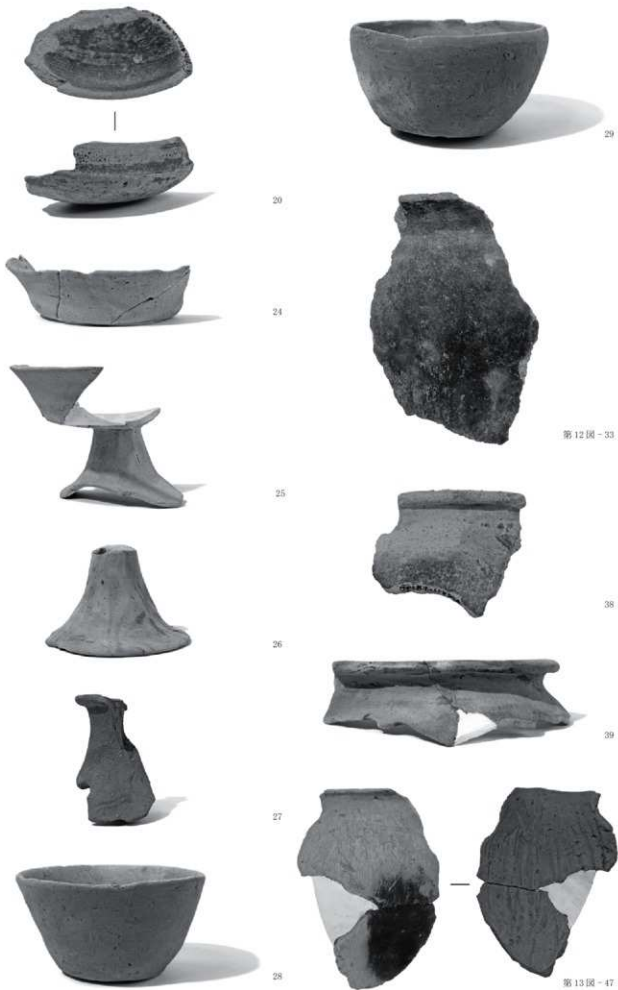
16



17



18





出土遺物 6



73



74

65



77



78



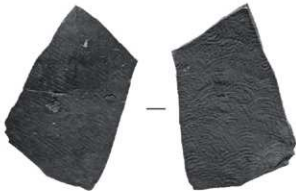
69



79



72



80





報 告 書 抄 録

ふりがな	ほんごうながれこいせき3							
書名	本郷流川遺跡3							
副書名								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第282集							
編著者名	小川泰樹							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒836-0106 福岡県小郡市三沢5208-3 TEL.0942-75-9575							
発刊年月日	令和4(2022)年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほんごうながれこいせき3 本郷流川	ほんごうながれこいせき3 福岡県三井郡大刀洗町 大字本郷456-1、458、 466-2、497-1	40503		33° 22' 48"	130° 36' 59"	2021.11.4 } 2022.1.28	1,000㎡	道路改良
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
本郷流川遺跡	集落	古墳時代	壑穴状遺構	弥生土器、土師器、須恵器		古墳時代後期の集落の縁辺部		

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
JH	2120261
登録年度	登録番号
4	4

<p>国道322号改良事業関係文化財調査報告  <b>本郷流川遺跡3</b>                  福岡県文化財調査報告書 第282集                  令和4年12月28日                  発行 九州歴史資料館                  〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3                  印刷 福岡印刷株式会社                  〒812-0892 福岡県福岡市博多区東那珂 1-10-15</p>
--

